

戦争遺跡保存は「何のために」、を問うことが大切

南守夫氏講演 「防空地下壕の保存と活用」ドイツの事例に学ぶ」を聞いて

北原 高子

去る三月九日、今年八月に第一七回戦争遺跡保存全国大会が予定されている、岡山県倉敷市で、現地実行委員会が開かれ、戦跡ネットの事務局として同席させていただきました。

現地実行委員会のお骨折りで、今年の記念講演はドイツから講師を招くことが計画されています。今回そのイベントとして実行委員会に先立ち、南守夫さん（戦跡保存全国ネット運営委員）のお話を聞きました。

南さんには、二〇一一年、松代大本営の保存を進める会定期総会の折、「戦跡保存と戦争記念館の意義と危険」と題して記念講演をしていただきました。平和祈念館の建設をめざしている私たちにとって大変示唆に富んだ意義深い講演でした。今回も南さんは、戦跡保存運動や平和博物館建設運動が、内容によって戦争肯定、戦争準備に向かう可能性があることを認識して、そのありかたを批判的に検討していかねければならないということを強く訴えておられました。

お話しの概要を紹介します。

◆問題提起

戦争遺跡の保存について、まず保存ありきという人もいるが、「何のために」を問わなければ保存運動の意義はない。昨今の日本の政治状況をみると、戦争を肯定し、海外で戦争を始めようとする人や、もっと低レベルでそれに賛同する人たちが目立ってきている。「尖閣諸島」や北朝鮮をめぐる、ナシヨナリズムが高揚して、「国防」力強化、自衛隊の増強待望論などが台頭し、戦争を肯定し、準備しようとする戦争文化の本格的な復活の兆しが一般社会に浸透しつつあり、日本における国民の平和願望の危うさと平和運動・平和博物館運動に危機を感じる。その芽は九〇年代に出ている。自民・経団連などの平和博物館攻撃・キャンペーンにより、九〇年代以降公立の平和博物館は基本的にはつくられず、戦争肯定にすすむあるいは潜むものは公立で少々つくられてきた。

民間では「ピースあいち」などが出来たが、

「あたらしい歴史をつくる会」や「日本会議」などが台頭し、対立関係が強まっている。戦争博物館のあり方も基本的に問い直さなければならぬ。

◆第二次大戦期におけるドイツと日本

ドイツがゲルニカの爆撃をしたのが一九三七年。同年、日本は戦争を開始し、ドイツとほぼ同時期に本格的都市攻撃を開始して、九州の大村から南京を無差別爆撃している。重慶では一万余千人を爆撃し「日本海軍の快挙」と報じている。やがて両国とも反撃を受けて国民が激しい爆撃にさらされる。すると地下に施設を移そう、軍の中枢部も地下に保護しようという動きになる。つまり、前提として空襲の歴史があつて地下壕がつくられる。

日本とドイツは総人口ではドイツの方が少し少ないが、空襲による死者はドイツは五〇万人以上、六〇万人を超えるという説があり、日本も偶然ほぼ同じ五六万人。この二国ほど被害を

うけた国はない。両国とも先に手を出し、無差別攻撃をし、空襲で大被害を受けて破綻するという道をたどった。

ただ、日本とドイツでは空襲被害の様相が大分異なっている。

日本が爆撃を受けるのは、およそ一年半ほどの期間で、被害を受けた都市で言えば広島・長崎で三〇万人、東京で一〇万人。(ちなみに一つの都市が一度の空襲で一〇万人もの被害が出た例はない。ドイツの都市では最大五万人。)あとは一〇都県ほどで計五六万人が亡くなるが、ドイツでは四二年から三年余りの長期間にわたり、ほとんど全土がくまなく爆撃を受け、五〇〇人以上の死者が出た都市が二三都市ある。ドイツは全土がロンドンからの射程範囲にあるが、日本は遠くから飛んでこなければ空襲できかないという地理的事情もあって、ドイツでは体験者がとても多く、日本では体験に偏りがある。そういった事情の違いが戦後の戦争遺跡保存や、博物館展示の内容にも影響を与えていると思われる。

◆ドイツの平和博物館の展示例

日本の平和博物館の展示の中心は空襲で、後の戦争の歴史から切り離し、加害の問題にはほとんど触れずに空襲の被害を展示するというパターンが多く、たまに加害に触れるとすぐに抗議がくる。

ドイツではどんな展示をしているのかというと、たとえばハンブルグのかつての防空壕を博物館にしているところでは、壕への通路にまず少女の写真が二枚貼つてある。一枚は、かつてユダヤ人の子どもを五〜一〇人位ずつ隔離して人体実験をし、戦後すぐ殺した、その被害者の一人。もう一人は片腕を上げ、脇の下に接種された結核菌の箇所を示している上半身裸の写真。つぎに飾られているのはギロチン用の刃物。一九三三年から四三年までに死刑判決で殺された政治犯だけでも一万人はいる。そして次には空襲の写真、と次々に戦争の痕をながめながら地下壕へと進んでいくようにつくられていて、空襲だけを取り出すことはしていない。

◆ミッテルバウ・ドーラ ナチ強制収容所記念館

ドイツの地下壕(防空施設)は大きく分けると①ナチス関連の避難地としてつくられた、政府関係の施設、②飛行機や重要産業に関わる軍需関係の施設、③市民公・私のための施設、に分けられ、ミッテルバウ・ドーラ強制収容所は②に分類される。

ナチスは選挙で合法的にトップになったというが、反対票は一二〇〇万票、有権者の三人に一人が投票したただけなので反対者はとても多かった。この収容所はナチに逆らう政治犯をつかまえることを一番の目的とする強制収容所で、

政治犯は死んでもかまわない、死ぬまで働かせると言われたところ。他に一般の強制労働者やポーランド人、ソ連、ロシアなどからも連れてきて約六万人がV2ロケットをつくるために強制労働させられており、ここでは二万人の死者が出たといわれている。戦後は入り口がふさがれていたが死体焼却所からの遺体収容ができず、焼かれた遺体のあとに名前を貼り付けて碑を建てた。九五年に本格的な展示が始まり、二〇〇六年、基金をもとに新しい展示が始まっている。展示のためのガイドブックには「加害者はナチだけではない。周辺の協力者、傍観者がいる」「手を貸した者たちについても考え直す」「展示の中心は被害者(強制労働者)の視点、傷ついた人々」「歴史を覆い隠すような追悼ではない」などのことが明記されている。

◆何のために地下軍事・政治施設を保存するのか

敗戦間際、日本では「本土決戦」、ドイツは「全面戦争」というスローガンをかけ、どちらも負けが必定であるにもかかわらず、地下施設をつくって最後まであがく、やめることをせず破滅に向かった。そうなのはなぜかを問わなければならない。

たとえば、サイパンに「万歳岬」があるが、なんでこんなところで飛び降りて命を落とさなければならぬのかという歴史的事実を覆い隠

し、背景・原因を明らかにしない追悼の仕方をしている。また、浜松の自衛隊記念館では、それが重慶などを爆撃し、人々を殺戮した飛行機であったことには全く触れず、いかに飛行機として優れていたかが展示され、侵略戦争と切り離して飛行機が語られる。技術の発展だけで、航空機を持った戦争の歴史、大量殺戮の推進力となったということには触れられない。戦争の全体史の位置づけを抜いて、被害や技術を切り取って語る動きは、民間の運動のあり方も含め、再考すべきではないか。

講演のあとに実行委員会が予定されていたため、途中の部分を少し省略してお話したが、「何のための保存か」を問い、保存運動・博物館建設が「政府の行為による戦争の惨禍を再び生じさせないため」になされているかどうか、の批判的検討の必要性が熱く語られた講演でした。全国の戦争遺跡保存運動でも、また、松代大本営の保存運動・平和祈念館建設運動でも、戦死者顕彰や戦争肯定の意味づけがなされないよう、常に肝に銘じていかなければなりません。八月一七日・一八日に行われる戦跡保存全国シンポの記念講演は、上記ミッテルバウ・ドローラ ナチ強制収容所記念館の館長が予定されています。ご期待ください。

(松代大本営の保存をすすめる会

きたはら たかこ)